

平成22年度　嬉野市立嬉野小学校

学校評価総括表

1. 学校教育目標
一人一人の子どもの知・徳・体を磨き、しなやかにたくましく生きる子どもの育成を図る。

2. 学校経営ビジョン		
めざす学校像	めざす児童生徒像(嬉野スピリッツ)	めざす教師像
(信頼される学校) ○確かで、豊かな学びのある学校 ○明るく礼儀正しい学校 ○一人ひとりのよさが生かされ、安心して通える学校 ○落ち着き、整頓された学校	(元気いっぱい・やる気いっぱい・笑顔いっぱい) ○元気いっぱい「あいさつ名人」 （いつでも、どこでも、だれとでも） ○やる気いっぱい「聞き方名人」 （学びは聞くことから） ○笑顔いっぱい「優しさ名人」 （優しい言葉・困った人への寄り添い）	(愛と創造の教師) ○魅力ある授業展開、迫力ある指導を求める教師 ○一人ひとりの個性や能力を見極め、指導に生かす教師 ○一人ひとりを受け止め、保護者と連携し、共に育てる教師

3. 本年度の重点目標	4. 前年度の成果と課題
○確かな学力を育成する、魅力的な学習を作り出す。 ・学習意欲の向上をめざし、「わかり合う授業」づくり ・確実な知識の習得をめざす授業づくり。 ・活用し、伸びを実感させる授業づくり ○心の教育の充実を図る。 ・体験的道德教育の推進と道德の授業の公開 ・UD教育の推進 ○特別支援教育の推進と充実 ・一人一人のニーズに応じた個別の指導と支援 ・校内支援体制の確立 ・専門機関、保護者との連携による、安心できる関係構築	学力については、一定の成果が上がっているが、二極化の傾向が見られる。個に応じた支援を充実し、基礎的な知識理解だけでなく、活用力を伸ばす取り組みを、全職員で探っていきたい。校内研究、指導法改善の取組をベースに、学校全体として共通理解を取り組んだ。家庭の役割や連携も重要であるので、家庭の協力も様々な面で働きかけてきた。 また、学校だけでなく地域や社会体育(部活)や公民館、民生委員会、区長会、老人会等との密接な関係構築を行い、連携強化を図った。密接に連携し合うことで、家庭を支え、児童を支えていく、そうすることで地域が変わり、学校も変わると考えとりくんできた。その発信を学校から行った。 重要課題は、確かな学力の育成(活用力を中心にして)、心の教育の充実、特別支援教育の充実の3本柱であり、来年度も継続、強化したい。

5. 総括表						
領域	評価項目 (主に関わる担当・P)	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校運営	学校経営方針 (校長・教頭・主幹・教務等)	・本年度重点目標の周知	・教職員・保護者・児童への周知度を上げる。	・学校便りを発行する。(月に2回) ・PTA総会・学年PTAで周知する。 ・ホームページで周知する。 （週2回更新） ・全校朝会・学年朝会での周知する。	A	○教職員に対しては、本年度の重点目標が十分周知できている。 ○児童に対しては、全校朝会、学年朝会、校内放送などで、学年に応じて具体的な講話をし、周知を図っている。 ○保護者には、学校ホームページ、校長ブログ等はこまめに更新ができ、学校の教育方針、教育活動がより見える形で発信した。 ・保護者へ学校目標、及び本年度の重点目標等を年度当初に周知させるものとして、直接に働きかける機会が少なかった。PTA総会、入学式等の便覧にも記載し、簡単に説明をする。
	教育課程 (校長・主幹・教務等)	・教育課程の完全実施とシラバスの公開	・月ごと、学期ごとに計画的に実施する。 ・教育活動の全体計画の把握をする。	・実施計画(授業時数・内容)の推進状況について月ごとに点検確認する。 ・PTA総会等でパンフレットによるシラバスの公開をする。	A	○教育課程の完全実施については、概ね良好である。さらに努力をしていきたい。 ○月ごとの授業時数の記録を確実に行之、全担任と教務主任が把握してできている状況である。 ○シラバスの一応の公開はできた。新教育課程についての周知活動は行ったが、さらに努めていきたい。 ○インフルエンザによる学校、学級閉鎖等で授業時間が激減し、その対応策として、授業時間の確保と学習内容の完全履修に向けた特別授業時間の増設を行った。

領域	評価項目 (主に関わる担当・P)	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校運営	教員の資質向上 (校長・教頭・研究主任)	・評価育成システムによる自己評価と自己管理 ・校内研究、研修による指導力の向上	・丁寧なヒアリングを実施する。 ・校内研究、研修を計画的に推進する。	・評価育成システム・キャリアアップ面談表の活用によるヒアリングを実施する。 (年間1人3回) ・全職員全員授業を行い、研究会を実施する。 ・講師招聘による専門的視点での研修会を実施する。(年間3回)	A	○講師招聘による全体授業年3回の実施(3学級)と、その他のクラスでも国語の授業研究会を実施ができた。授業を参観し、研究会で意見交換をしたことで、研修を深めることができた。 ○服務に関する研修は、夏季休業中のセクハラ以外の研修は十分な時間の確保が難しかったが、職員会議の折に、不祥事の防止、飲酒運転・交通事故の防止など、自分自身をチェックし振り返る形で見直し、研修をすることができた。 ・ヒアリングは、計画的に実施し、評価育成システムのさらなる活用を図りたい。
	保護者・地域との連携 (教頭・主幹・教務)	・授業参観・懇談会への参加 ・学校、学年、学級だよりの発行 ・学校アンケート、児童アンケートの実施	・年間を見通した参観や懇談の事前お知らせを充実する。 ・お便りを定期的に発行する。 ・学校評価活動の活用を行う。	・毎回まちコミによるメール配信を事前に行う。 ・学年・学級通信は、それぞれ月1回は発行する。 ・保護者、児童アンケートの実施・学校関係者評価の実施をし連携する。	B	○学校行事の連絡については、プリントとメールにより確実に連絡できた。緊急の連絡については、必要に応じてメールで連絡できた。 ・十分ではないが、総合的な学習の時間などへの地域や保護者との連携した取組が増えてきた。 ・アンケートの各項目の結果からは、保護者との連携は概ね良好であると言える。 ・年間を通しての6回の授業参観の出席率の平均は約75%で概ねよい。ただ、3回の懇談の出席率の平均は約38%である。授業参観後の計画(学年、学級懇談等)への参加者の増加を図る。 ・PTA活動のさらなる充実を図る。
	小中連携教育の推進 (教頭・主幹・教務)	・3部会(授業部・生徒指導部・教育相談部)による連携	・授業研究会で連携する。 ・連携会議による共有と課題に対する取組強化を行う。	・他校への授業研究会の案内、他校の授業研究会へ参加をする。(3回) ・夏季休業中に3部会を実施する。 ・長期休業中の連携指導計画を作成し、対策会議を開催する。(2回)	B	○中学校の学校生活を直接中学生から聞く機会(先輩と語る会)を計画し、充実した小中連携の在り方を考えることができた。 ○基本的な生活習慣・学習習慣に関して中学校校区で共通した指導内容を作「学習の手引き」として作成することができた。 △「家庭学習の手引き」を家庭に配布した後の活用方法について考えていく必要がある。 △中学校や近隣小学校への授業研究会の案内はできたが、実際に参加するまではならなかった。
	危機管理 (教頭・安心安全P)	・危機意識の共有化 ・危機管理マニュアルの認識	・危機管理研修会を実施する。 ・それぞれの部署における危機意識の高揚とマニュアルの共有化を図る。	・職員会議ごとに危機意識を高める。 ・マニュアルの見直しをし意識化を図る。(2回) ・専門家講師による研修会を実施する。(1回) ・校内外のハザードマップを作成する。(1学期中)	A	○危機管理マニュアル等、危機管理に関わる研修会を実施し、職員の危機意識を高めることができた。 ○危機管理マニュアルの見直し・追加修正を行った。 ○作成した校外のハザードマップをもとに集団下校を行い、職員も実際に歩きながらの指導をし、児童の通学路の実態を把握でき、更にハザードマップの修正を行うことができた。 ・校内のハザードマップを作成を進める。

領域	評価項目 (主に関わる担当・P)	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
教育活動	確かな学力の育成 (やる気P)	・言語力の向上 ・算数の活用力の向上 ・学習意欲の向上	・言葉にこだわり、言葉を大切にする態度を育てる。 ・問題解決力や活用力を高める。 ・少人数、TT等の指導方法の改善の実施により、基礎的内容の定着と学習意欲の向上を目指す。	・国語タイムやチャレンジテストを実施し、漢字の定着率を85%以上とする。 ・音読集会を年6回実施する。 ・国語辞書を日々の活動の中で活用させる。 ・めあてを明確にとらえさせ、問題解決の過程を通して考える力を伸ばす。 ・各単元で、発展問題・活用問題に取り組ませる。 ・児童の実態と教科内容に応じて、指導方法についての計画を立てて、指導にあたる。 ・算数タイムやチャレンジテストを計画的に実施し、計算の定着率を85%以上とする。	B	○国語の授業や国語タイムなどを通して語彙は増えてきた。また、チャレンジテストを通して、漢字の習得が十分にできた。 ○問題解決の学習を通して、考える力を伸ばすことができた。また、活用する問題に取り組ませることにより活用する力が伸びてきた。 ○TT等実施の変更が多く、効果的な指導法の取り組みが十分にできない学級があり、学習意欲の向上に学級差が大きかった。加配や級外の配置を見直し、少人数指導やTTなどの指導法改善を充実させて、児童の学習意欲をさらに向上させていく必要がある。
	心の教育の充実 (笑顔P)	・一人一人が安心して、豊かに学び合う学校生活の充実 ・道徳教育、人権教育の充実	・こころのノートを活用する。 ・道徳の授業参観を実施する。 ・いのちの大切さについての共通実践に取り組む。 ・共に生きる人権意識の啓発を図る。	・ふれあい道徳の時間として各クラス公開授業を実施する。(年1回) ・道徳的実践活動としてのあいさつ運動を実施する。(週3回) ・平和、いのちの大切さ、について講話を実施する。(各1回) ・人権週間に合わせて全児童に人権作文や人権標語を作成させる。 ・人権集会を5月に1回実施する。 ・QUアンケートを活かした学級経営を実践する。	A	○ふれあい道徳や学級作りへの道徳の時間の取り組み等で、教職員の道徳教育実践への意識が高まった。 ○5月に人権集会、12月に人権週間(人権標語や学年学級での取り組み)の2回の取り組みにより、自分や周りの人を大切にし、仲良く学習したり生活したりしようとする意識が高まった。今後、周りの人の心を傷つけない日常会話等の指導も継続して行う。 ○平和集会で絵本の読み聞かせや講話などを行い、平和に対する効果的な取り組みができた。来年度は、戦争体験者の講話なども計画していきたい。 ○教育相談週間をもうけ児童一人一人と話すことができ、児童理解が深まった。今後は、日程等計画的に実施する。 ○お世話になったひとたちに年賀状を贈る取り組みは今後も工夫を加えながら続けていきたい。 ○QUアンケートを実施し、その結果を学級経営に活かすことができた。
	健康・体力づくり (元気P)	・体力向上の推進 ・衛生習慣の確立	・児童の体づくりを推進する。 ・衛生習慣の確立	・外遊びの奨励(遊びの紹介)をする。 ・マラソン大会に向けたマラソンタイムの実施など、学校行事や季節に応じた取組の実施をする。 ・栄養士と連携した食育についての授業の実施する。(学年ごとに年1回)・ ・歯磨きビデオを見ながらの正しいブラッシングの実施をする。(毎日) ・手洗い、うがいを徹底(毎日)する。	A	○全体的に見て、外遊びはよくできている。2学期はマラソンタイムを設定することで全校生が外に出て体を動かすことが増えた。 ○全クラスにおいて学校栄養教諭による食育の授業を設定し、専門的な食育指導を実践できた。朝食の栄養バランスチェックを1週間継続して行うことで保護者の関心が高まったクラスがあった。 ○引き続き歯磨きのビデオを2度(繰り返し)流すことで、歯磨きの習慣化が図れた。また、今年度はクラスごとにペットボトルでうがい用お茶を配布することにより、さらにうがいの徹底が図れた。

領域	評価項目 (主に関わる担当・P)	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
教育活動	読書指導 (やる気P)	・朝読の充実 ・図書館の利用指導の充実	・静かな環境で、集中して朝読書を行う。 ・年間貸出冊数を、低学年で120冊・中学年で100冊、高学年で80冊読むようにする。	・市立図書館等と連携し、学級文庫や学年文庫の図書の充実を図る。 ・おすすめの本50冊を教師自ら読み、児童に推奨する。 ・教師によるお話し会や図書館祭りで、様々なジャンルの本を紹介し、読書の幅を広げる。 ・図書委員が中心になり、多読者の紹介や呼びかけを行い、読書への関心を高める。	A	○朝読書の取り組みが昨年よりよくなった。始業前にほとんどの児童が本を選び静かに読書に取り組むようになった。 ○年間貸出数の目標がほぼ達成できた。しかし、個人差が大きく。来年度は、貸出数が少ない児童への対応について工夫していく必要がある。 ○教師によるお話し会の数が少なかったので、来年度は、計画をきちんとたて実施する必要がある。
	生徒指導 (安心・安全P)	・生徒指導の充実 ・基本的生活習慣の確立	・事故防止、非行防止に努める。 ・あいさつ、落ち着いた生活、掃除等、基本的生活習慣を身につけさせる。	・学校生活の決まりを全児童・家庭に配布し、周知徹底させる。 ・通年目標(あいさつ、無言掃除、廊下歩行)と、月毎の生活目標を設定し、重点的に指導する。	B	○小さな問題行動に対して素早く対応ができたので、大きな問題行動になることがほぼなかった。 ○清掃指導に対して職員の意識が共通して高まり、児童の清掃への意識も高まった。 ・通年目標については、さらに指導の定着を目指していくことが必要である。
特定課題	小学校低学年の学習環境の改善充実 (少人数学級指導) (やる気P)	・基本的学習習慣の確立 (学び合う習慣) ・基本的生活習慣の確立 (目力・友力・声力)	・相手を見て話を聞き、最後まではっきりと話すようにする。 ・学習道具や宿題を忘れさせない。	・聞き方名人、話し方名人のポイントを掲示し、活用する。 ・「家庭学習あいいうえお」の確実な点検と指導を毎日行う。 ・基本的な学習習慣・生活習慣の手引きを作成し、家庭に配布する。 ・スクールミーティング、保護者アンケートを実施する。(各3回)	A	○「家庭生活あいいうえお」を毎日実施・点検するなど、基本的生活習慣を学校と家庭が連携して取り組み、基本的な生活習慣を確立することができた。 ○授業が始まる前に次の授業の準備をしたり、チャイムが鳴ったら席について学習に取り組むなど、基本的な学習習慣が、ほとんどの児童に身についた。 ○「家庭生活あいいうえお」を年度途中で変化をつけたりしてマンネリ化を防ぎ、また、機会を捉えて保護者への協力も呼びかけていく必要がある。
	魅力ある学校づくり推進事業 (開かれた学校P)	・地域連携協議会の推進 ・米作り等の体験活動の重視 ・学級満足度の向上	・地域連携協議会との連携を強化する。 ・地域に目を向けた体験学習を行う。 ・QUアンケートにおける学級生活満足群について全国平均を上回る。	・地域・関係機関との連携を図る。 ・地域連携協議会を年3回を開催する。 ・各地区の対話集会を年1回開催する。 ・民生児童委員会を年1回、学校評議員会を年3回開催し連携を図る。 ・生活科・総合的な学習の時間を活用し、体験活動に取り組みさせる。(米作り、地域の産業・歴史等の学習、学習発表会の開催) ・学級活動、道徳の時間を活用し、仲間作りにつながるエンカウンターを実施する。 ・学級や児童の実態を把握し、全職員で共通理解を取り組む。	A	○地域連携協議会では、参加者が多く充実した協議を行うことができた。 ○地域素材を生かした体験的な学習の充実については、12月に学習発表会を実施し、地域へ発信することもできた。 ・今後は、総合的な学習の時間の標準授業時数の削減に伴い、指導計画の改善と工夫を行う。 ○Quアンケートでは、各学級づくりについて、学級担任の意識の高揚が見られた。 ・アンケートの結果から特定の課題を見つけ出し、指導に生かしていくことが望まれる。

6. 総合評価

<学校評価を通して>

- ①学校目標を具体的な教育活動へ結びつけ、全職員で共通理解をしながら推進することができた。
- ②プロジェクトを中心に、PDCAのサイクルで、児童の様子や問題点を把握しつつ、教育活動の方策の検討や具体的な取組、評価を行うことで、組織の活性化・強化につながった。また、この一連のプロジェクトの活動を全体に広げたり、全体からもプロジェクトへ働きかけたりする機会を設け、学校全体として学校目標実現に向けた実践ができた。
- ③どの職員にも出番や役割が位置づけられ、責任を持って教育活動にあたることになった。また、学校全体の教育活動と自分の教育活動とを比較し、意識を持って臨もうとする姿が見られた。
- ④各項目での成果を受けて、職員は自らの教育活動に達成感を持つことができた。

<評価内容について>

- ①学校運営、教育活動、特定課題のどの項目においても、プロジェクトを中心に実践し、成果が見られた。児童の実態を見ても、児童や保護者の評価から見ても、学力や学習習慣、生活等、いろいろな分野で、成果が上がってきていることが分かる。
- ②一部の項目では十分に達成したとは言えず、課題が残った。取組の継続や見直しが必要である。
- ③中間評価をうけて、学習習慣・生活習慣の定着など、新しい取り組みや取り組み方を変えるなど新たに行動をおこすことができたことは、評価が活きたと言える。

<評価方法について>

- ①職員や保護者、児童のアンケートなど、いろいろな調査結果を考慮し、多面的に評価することができた。
- ②プロジェクトと全体のつながりを大事にすることで、プロジェクトの評価から全体へ、全体の評価からプロジェクトへと、双方向の働きかけで評価をすることができた。
- ③学校関係者評価委員の評価を学校改善や職員の意欲につなげることができた。

<評価結果について>

- ①学校評価の結果を、本年度の教育活動や次年度の計画に活かすことができた。
- ①学校評価の結果を、ホームページや配付資料等で保護者や地域に誠実に知らせることで、「開かれた学校づくり」につなげ、学校への信頼を高めることができた。

7. 来年度の改善策

- 学校評価が、学校目標の具現化を目指し、学校全体が、職員一人一人が学校目標を意識した教育活動になるように、各プロジェクトを中心として進め、組織としての充実・強化に結びつくように位置づける。
- 学校目標と各プロジェクトの教育活動、評価活動がきちんと結びつくように、年間を見通した取組になるようにする。
- 教育活動を評価するための、各種アンケートの項目を教育活動の評価に結びつくように、文言や量を見直す。
- 重点事項として、学力の向上（活用力）、心の教育の充実、特別支援教育の充実の3本柱をすえ、来年度も継続し強化していく。
- 学力については、一定の成果が上がっているが、二極化が広がっている。本年度の校内研究や指導法改善の取り組みをベースに、個に応じた支援を充実し、基礎的な知識理解だけでなく活用力や言語力をのばすために、全職員学校全体で教育活動を練りあげていく。特に、言語活動（表現活動）につながる日常の交流活動や振り返りを意識的に設定していく必要がある。また、基本的な学習習慣・生活習慣が身につくように、家庭の役割や連携大切にし、家庭の協力も様々な面で働きかける。
- いろいろな教育活動を充実させるための環境作りとして、地域や社会体育（部活）や公民館、民生委員会、区長会、老人会等との密接な関係構築を行い、連携強化を図っていく。密接に連携し合うことで、家庭を支え、児童を支えていく、そうすることで地域が変わり、学校も変わると考える。その発信を学校から行う。
- 学校関係者評価委員会の評価が客観的に行われるように、情報伝達、授業等の公開、職員との意見交換等の充実を図る。また、学校関係者評価委員会の評価を職員に還元し、教育活動の改善・充実、職員の意欲につなげる。